

今つながる

20

脱原発へ手作り「野菜デモ」

え方をもっと考えないと」と、気を引き締めた。

赤、白、緑。色とりどりの帽子をかぶった約10人のデモが、東京・内幸町の東京電力本店前に現れた。東日本大震災からちょうど1年の3月11日午後。里の野菜デモの面々だ。

野菜デモとは放射性物質にさらされる野菜の気持ちになって、原発に「ノー」という趣旨。色とりどりの帽子はニンジンやネギ、大根など野菜の形をしている。魚の模型もある。「野菜にも一言いわせて」のほりがまぶしい。

全国に出現した「普通の市民」が始めた「手作りデモ」の一つ。デモといえば、政党や労組などが組織し参加者は動員指示を受けて集められるものが多かった。

だが、これまでデモとは無縁だった里らは「東電人殺しとヒステリックに叫ぶデモに参加する気になれなかった」。もう少し自分たちが主体となって、女性目線で意思表示をしたい。そんな思いで手作りデモを始めた。「おいしい野菜を食べたい」「海を汚さないで」。デモで繰り返された言葉も柔らかな身近な生活感がある。

里はもともと社会問題に関心があった。高校まで通った熊本県は水俣病被害があり、過疎化からシャッター街も多い。都内

「普通の市民」連帯図る

の病院のストレスケア病棟で看護師として働いたときは、突然うつ病になる花形営業マンや不況で就職できない若者の疾患など社会矛盾を目の当たりにした。今は神奈川県にある障害者作業施設で働く。
里が野菜デモのメンバーと知り合ったのは、社会改革を促すアジア太平洋資料センター(PARC、東京都千代田区)だ。PARCは貧困や人権問題などの社会問題に積極的に取り組む方法を探る勉強会を地道に続けている。
熊本の実家は農業を営み、原発事故が農家に与える被害がすぐに分かった。福島県で酪農家が原発事故後に自殺したことも知った。「犠牲になるのはいつも地方の人。問題があるのに見えぬふりはしたくなかった」
PARCで知り合った会員の鈴木沙織



取材メモ

オバマ米大統領が当選した4年前の米大統領選挙を取材したとき、草の根運動が国のトップを変える原動力になることに驚いた。米国ではその後も保守派のティーパーティー(茶会)や格差是正を求めるウォール街占拠運動などの大衆運動が、国を活性化している。
日本でも震災後は政治や官僚、電力業界への信頼が失墜し、市民の覚醒が起きた。野菜デモの一人、団体職員の内田聖子(41)は「原発ノーを言っていたら良い時は終わった。子どもの内部被ばく、脱原発で生活に必要な電気をどう確保するか、など各論をしっかりとらせないと、普通の人はついてこない」という。
「連帯の哲学」。里はこの言葉が好きだ。「しょうがない、とあきらめないで。子どもを持つお母さんには不安なはず。黙っていないで」。この思いをどう伝え、連帯を実現させるか。里の今の課題だ。(敬称略)

文・杉田弘毅
写真・有吉叔裕
(月曜日に掲載します)



手作りの横断幕を持ち都内をデモ行進する里知歌子(中央)ら「野菜デモ」のメンバーたち



都内でのデモの途中でひと休みする「野菜デモ」のメンバーたち

そんな思いから、昨年から里らは言い放しのデモでなく知識とつながりを深められる「オフ会」も始めた。
今年5月中旬。PARCを訪れると、鈴木らが「放射能に負けない食」をテーマに免疫力を高める食材、調理法を話し合う会合の準備をしていた。「放射能に強い食」の持ち寄りも計画、気軽に参加できる方法を探して長い話し合いが続いた。

世論調査では脱原発派は多数派だ。この世論には市民の手作りデモも貢献しているだろう。野菜デモだけでなく、「あったかデモ」(電気を使わずに暖をとろう)、「サウンドデモ」(音楽を流し踊りなどでメッセージを伝える)、「パレードデモ」(パフォーマンスも行う)などは、これまでの枠を破っている。
野菜デモを支援するPARC事務局長の内田聖子(41)は「原発ノーを言っていたら良い時は終わった。子どもの内部被ばく、脱原発で生活に必要な電気をどう確保するか、など各論をしっかりとらせないと、普通の人はついてこない」という。